

西洋人による日本風景の評価 III Revisiting described landscape in Japan III

青木 陽二^{1*}, 藤田 均², 中谷 昌宏³
yoji aoki^{1*}, FUJITA, Hitoshi², NAKATANI, Masahiro³

¹ なし, ² 青森大学, ³ 新潟大学

¹None, ²Aomori University, ³Niigata University

江戸時代の長く国を閉じた後、多くの外国人が日本を訪れ、彼らは日本で見つけた美しい景色を旅行記(表1)に記した。最も有名な記述は”日本輿地紀行”(バード、1880年)と”サトウ報告 PRO 33-30”(サトウ、1872-1882年)として知られる。外国人の長い間の除外は日本の風景に人々の興味をもたらした。彼らは日本の内陸に困難な旅をし、母国とは異なる地形の特徴を発見した。バードは彼女のイングランドの妹に多くの手紙を書き、サトウ(1884年)は中部と北部日本の最初の英語の旅行ガイドブックを作った。

それらは、自国にある美しい風景を知らない日本人には興味深いものである。第二次世界大戦後の信じられないほどの経済活動の回復は、都市部への急速な移民と、調和のとれた風景を混乱させた。日本の風景のほとんどは、国家プロジェクトだけでなく、地元の建設や開発のために変更されていった。豊かな植生が伐採され、地形が再形成され、新たな景観は、経済的投資によって構築された目障りな看板によって妨害された。最近では、西洋人の旅行記に記された昔のような風景を見つけることは困難です。

彼らの旅行記は、日本の美しい風景の貴重な記録となってしまった。百年もの間、日本人は、欧米諸国の思考や技術開発を理解するために専念していたので、彼らが日本の風景について書いたものを理解できなかった。彼らは懸命に働き、欧米諸国と同じレベルのような科学的知識と技術の進歩を獲得した。しかし、彼らは環境すなわち景観に関心を払わなかった。彼らがヨーロッパ諸国の人々が指摘した風景の価値を理解していたなら、その美しい風景を失わなかっただろう。

本稿は、風景の記述の価値を調べるものである。風景は、絵やビデオ映像と全く同じではない。風景は、現地における環境の実体験です。景観の評価は、環境の物理的特徴の単なる説明ではない。景観の印象は、その場の彼らの認識を通じた個人的な経験である。彼らの心理的反応に依存する景観の評価が集約され、脳内に蓄積され、風景の記述を生み出す。個人的な経験は、現場の人々の間でも異なるが、経験の一部に、人々の間で似たような印象が示される。

それらの共通点は、個人的な嗜好の類似性や景観の刺激の強さの両方によって与えられる確率に依存する。強烈な刺激が、昔の旅行者に強い印象を提供したならば、現代の我々も彼らの印象を見つける場合もある。その印象の証拠を見出さなければならない。風景の経験はその説明を理解するための最も信頼性の高い正確な方法である。だから、19世紀の終わりまでに来日した西洋からの訪問者によって書かれた旅行記に記載された地域を訪ねることにした。

歴史的な時間と民族種の両方を超えて、古代の旅行者と現代の人々が類似の景観体験を持つことができるといえる。個人的な風景経験が、感情に基づく好みを提供するため、このタイプの経験は、時々、景観評価に関する興味深い科学的知見を提供する。異なった人々の一貫した経験は、人間を通して風景の共通の理解を提供する。現代の人々は、古代の旅行者に似た景観の印象を見つけられれば、昔の旅行者に好まれた風景と、現代の人々に共通の望ましい風景を見せるかも知れない。昔の外国人観光客の憧れた風景は、日本の景観保全政策に良い指針を示すかも知れないと結論する。

キーワード: 西洋人来訪者, 日本風景の評価, 旅行記

Keywords: western visitors, appreciation of Japanese landscapes, travelogue